オタクの魔法世界珍道中

蒼零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
オタクの魔法世界珍道中

【Ｎコード】
Ｎ３９７０Ｖ

【作者名】
蒼零

【あらすじ】
女神の力により悪魔の実の力を携えてネギまの世界を駆け巡る男はそこで何を手にするのか？

第1話「転生生活スタート」

辺り全てが真っ白の世界で俺は目が覚めた

「ここは一体…」

「やっと目が覚めたのね」

後ろから声がしたので振り向いてみると金髪の幼女が腕を組んで立っていた

「君は一体？」

「私？女神よ」

女神と名乗る幼女
なんだか背伸びしてるみたいで可愛いな

「それで女神様が何か用で？」

「当たり前じゃない、そうね簡単に言えばあなた死んだわ」

あっさりと死亡宣告されたけどやっぱりかと感じてしまう

「本来ならそのまま天国か地獄に行くのだけど、あなたはもう一つ選択肢があるわ」

「もう一つ？」

なんとなくだけど分かった気がする

「他の世界へ転生よ」

やっぱりですか、二次創作でよく見るけどまさか自分がなるとは

「それでどうする？」

「転生でお願いします」

「そう、それじゃどの世界が良い？」

え？世界も選べるの？

そうだなぁ、やっぱり魔法とか使える世界かな

「それじゃリリカルなのはの世界にしてください」

原作はあんまり分からないけど魔法を使えるだろうし

「あ～、ごめんその世界は無理。先約が居るのよ」

先約って俺以外にもいるのか転生者

そうかなら超能力も良いかな

「えっと、とある「ごめんなさい、ちょっと待ってもらっていいかな」え？はい…」

次の世界をお願いしようとしたら幼女が何かを察知したのか話を遮る

了承したとたんに幼女がどこかへ走り出して言った

途中お姉ちゃんに変なことしたら許さない～！！と叫んでいたけど

何だったんだろう？
というか居たんだ姉が
数分待つと幼女がトコトコ歩いて帰ってきた
「ごめんなさい、ちょっとあってね」
にっこり笑う幼女だけどなんか怖い
「それで行きたい世界だけどとある魔術の禁書目録の世界は駄目かな？」
あそこは原作の部分は危険一杯だけど一般人なら過ごしやすそうだしね
他にも最先端の技術とかに触れてみたい
「え～っと、その」
なにやら気まずそうな顔をしてるけどもしかして
「まさかここも先約が居たりする？」
「ごめんなさい！ついさっきそこに送ったのよ」
やっぱりか
それだと…そうだ
「ネギまの世界は行ける？」
「ちょっと待ってね…大丈夫、なんとかなるわ」

良かった、これで駄目だともう思いつかない
あるにはあるけどどれも
「世界は決まったから次は固有能力ね」
「固有能力って？」
「そうね、簡単に言えば魔力無限とかね」
チートすぎるな
ん～どうしようかな
「それと本当なら一つしか固有能力はあげれないんだけど、色々迷惑掛けたし三つまでならいいわ」
まじか！それってかなりのチートに出来るって事じゃん
……よし決まった
「一つ目は長命にして欲しい、出来れば見た目は５０年で１歳分成長した感じで」
あの世界の人は地球以外にも火星に住んでるし、そのぐらい長命なら色々見て回れるだろう
「了解、次は？」
「悪魔の実を全て使えるようにして欲しい」
大好きですあの漫画

「いきなりすごい物を要求するわね、まぁ大丈夫だけど」

さすが女神様
あんな無理やりな要求も受けてくれるとは

「最後に、悪魔の実のデメリットを無くす、最低でも少し弱くなるぐらいにして欲しい」

海に落ちたら即バッドエンドは嫌過ぎる

「ん～デメリットは無くせなかったけどそれで死ぬような事にはならないようにしたわ」

お～まじで女神様に感謝だ！幼女だけど

「それじゃあ今から送るけど準備は良い？」

「はい、大丈夫です」

女神様がぼそぼそ何か呟くと俺の体が白く光りだす

「新たな人生を楽しみなさい」

視界もどんどん白に染まっていき最後に女神様が微笑むのが見えた

あれ？俺っていつの時代か聞いてたっけ？

第二話「転生してから…」

転生してから早くも一週間が経ち俺は山中の大きな湖の辺で修行に明け暮れていた
転生初日に目が覚めた場所がここだったのと近くに果樹が多くあり、湖には魚も泳いでいたので食料には困らないだろうと思いここで生活を始めた

「はっ！」

能力を使うにしても体が出来なければ意味がない
その為時間があれば鍛錬をしている

「えい！」

足をある程度開き腰を落とす、その後正拳突きを繰り返す
１０分もすれば疲れがたまるので休憩を挟む
本当ならそのぐらいで疲れないのだが理由がある

「ぷは～、水が美味しいぜ。それにしてもだ…」

湖の水を手で掬いゴクゴク飲んでいく
その後水面に映る自身の姿を見る

生前は大学生だった
しかし水に映るのは5，６歳の少年の姿
肩に届くぐらいの少し暗めの茶髪
ぱっちりした黒い瞳
少しぽっちゃりした丸顔

簡単に言えば幼少期の俺の姿だった

「いやさ、長命にしてくれだけで年齢は言ってなかったけどさ」

空を眺めながら呟く
俺の言った通りなら５０年で見た目１歳成長だろ？
生前に戻るにはどんだけ掛かるんだよ
そもそも、それまで生きてるのか？

「あ～やめやめ、そんな事考えるなら能力の練習だ」

顔を軽く叩いて意識を切り替える
その後近く立っている樹の近くまで歩いていく
その樹は所々凹み自然に出来た物では無い
俺が原因だけど

「今日こそこの樹を倒す」

意識を集中させる
思い浮かぶは麦わらの少年の能力

「いくぞ！ゴムゴムの～！」

右腕を振りかぶる
するとそのまま腕が後ろに伸びていく

「銃弾（ブレット）！！」

右拳が縮んで戻ってくる勢いを殺さずに樹を殴りつける
ドンと音と共に樹に拳がめり込み樹をへし折った

「よっしゃ！やっと出来た！」

練習を始めてやっと出来た
ゴムだから拳は痛めないけどコントロールが難しかった
少しでもずれるとあさっての方向に飛んでいってしまう
上手くコントロール出来ても勢いが無くなって樹に跳ね返される時もあった
まだまだ練習が必要だけどまずは一段落だ

「さて次は…ん？」

ふと茂みを見ると狐がひょっこり顔を出していた
その狐は子供でトコトコとやってくる
俺の傍までくると軽く鳴きながらじゃれてきた

「また来たのか、ご飯欲しいのか？」

普通なら動物と話は出来ないが俺は違う

ヒソヒソの実

これは動物と話をすることが出来る
ゴムゴムの実よりも早くに使いこなせるようになったものだったりする
その能力でこのこと話すことが出来て、以来よくここにやって来る
基本的にはお腹が空いたとか暇だから遊んでだけど

「ん？そうじゃない？」

それじゃぁ一体何なんだろうか？
疑問に思っていると服の端を咥えて引っ張る
どうやら一緒に来て欲しいらしい
話を聞くと誰かが危ないらしい

「分かった、ちょっと待ってて」

狐を服からそっと離して家に戻る
家といっても偶然見つけた洞穴だけど
中には収穫した果実や加工した魚などが置いてある
前の世界では旅が好きだったので、必須スキルだと思いサバイバル技術はある程度あったりする
その洞穴から採取しておいた薬草を取り出す

「さぁ、行こうか」

外で待っていた狐に声を掛ける
狐が一鳴きした後走って先導する
それに遅れないように走り出した

第三話「出会い」（前書き）

一応残り二つも細々と書いていますが何故かこれはすらすら書ける
不思議すぎる

第三話「出会い」

狐に後をついて行って数分
山中ということもあって地面は凸凹して走りにくい
鍛錬の成果によりそこまで苦もなく走れる

「もうすぐ？」

俺の問いにあと少しと答える狐
しばらくすると視界は山中から地面むき出しの道に変わる

「初めて外に出たけどこんな風になってたんだな」

感慨深くなっていると早く来いと狐が鳴く

「ああ、ごめん。そうだよね早くしないと」

一人反省をしてついて行く
山中よりも地面がしっかりしているのでより速く走れる

「もしかして、あれか？」

数百メートルほど離れた所に人だかりが出来ている
見た感じだと金髪の少女に大人達が囲んでいる
前を走っている狐があれだと告げる

「何やってるんですか！」

少女と大人達の間に割り込む

大人達を睨みつける

「なんだ坊主！そこをどけ！」

俺の乱入で両者驚いていたが冷静になったリーダーらしき人が怒鳴りつけてくる

「なんで大人が寄って集って女の子を虐めてるんですか！」

「坊主、そいつがなんなのか分かってるのか！そいつは吸血鬼なんだぞ！」

吸血鬼という言葉で後ろにいた少女がビクリと震えた気配がしたにしても吸血鬼？後ろの子が？

「吸血鬼は人間の血を吸って眷属にしちまう化物なんだぞ！」

「そんなっ！私はそんな事をしない！」

男が後ろに居る少女の危険性を語るがそれを否定する少女

「あの、一つ聞いて良いですか？」

「なんだ小僧？」

「実際にこの子はそんな酷いことをしたんですか？」

聞いている感じだと吸血鬼が悪いとは言ってるけどこの子自身のことは言ってない

「はぁ？何を言ってるんだ、今は何もしてないがその内俺達が襲われるに決まっている」

今はね…ってか

「それじゃぁ君はそんなことする？」

「そんなことしない！」

少女に尋ねると即答で返された

「だそうですけど？」

「そんなの信じられるか！どけ！ここは俺が殺してやる！」

男にまた尋ねると信用ならないと男が持っていた鋤で少女を殺しに掛かる

それに合わせて他の人達も様々な農具を持ち動き始める

急すぎて少女は動けなくてその場で佇んでしまう

「死ね！吸血鬼！」

「ひうっ！」

男が鋤を振り下ろし殴り殺そうとする

そして少女は迫りくる迫り来るそれに声をあげる

しかし鋤は少女に当たることは無かった

「なっ！」

男の声が驚愕に染まる
何故なら…

「効かないねぇ、ゴムだから」

少女を守るように俺が立ちはだかり攻撃を受ける
大人でも大怪我する勢いだったそれを頭に受けるがピンピンそている
良かったゴムゴムの実を使っておいて
これなら打撃は一切効かなくなる

「ひっ！ば、化物」

誰が漏らしたのか俺に対する恐怖の言葉

「お、怯えるな！たかが小僧一人だ！」

男がなんとか恐怖を押さえ込み他の人を向かわせる
斧に鎌などの刃物が俺の体を切り裂きバラバラにされる

「きゃー！！」

「はっ、化物はおとなしく死ねばいいんだ」

少女が俺の姿を見て悲鳴を上げる
そして男がバラバラになった俺を見下す

「さて次はお前だ吸血鬼」

男が少女に狙いをつける

「だ、だれか、助けて…」

「あの小僧も死んだ、誰も助けにこねえよ」

少女が助けを求めるが男はそれを否定する

「くたばれ！吸血ｋ「全く、誰が死んだって？」なっ！なんだと」

少女が殺される直前に俺は立ち上がる
体がバラバラのまま
一部は宙に浮いている

バラバラの実

これは赤っ鼻の船長が食った実
自分の好きな部分をバラバラに出来る
当然斬撃は効かない
ゴムゴムと並列で練習していたものでそこまで複雑な動きは出来ない
しかし脅しならこれで十分

「む、無理だ、こんな奴どうすれば…」

「大人しく去るんだ、さもないと…」

「ひぃーー！！」

大人達が我先へと逃げ出していった
普通頭が浮いて喋っていれば逃げたくなるよな

「ふう、よいしょっと」

大人達は必死だったのか農具が置き捨てられていた
近くに少女しか居ないことを確認した後バラバラになった体を元に繋ぎ直す
軽く体を動かすがどこにも不具合は無いな

「えっと、大丈夫？」

残った少女に語りかけるがいまいち状況が理解出来てないのかポカンとしている
そうだよなぁ、目の前で撲殺されそうになっても平気で、バラバラになって死んだはずなのに生きてるとか
昔の俺なら絶対信じられない光景だよな

「ええ、おかげで」

数分してなんとか正常になったのか答える少女

「そう、良かった。気をつけなよ、それじゃ」

手を振りながら少女に別れを告げ山へと歩き出すが

「ま、待って！！」

少女の呼びかけに足を止める

「ん？何？」

「どうして助けてくれたの？私は吸血鬼なんだよ？」

「うん、そうだね吸血鬼だね。でもそれが何？人に迷惑を掛けてないなら問題ないじゃん」

「で、でも…」

どうやら納得できないのか口ごもっている
仕方がない、少し卑怯だとは思うけど

「逆に聞くけどさ、さっきので分かったと思うけど俺は化物だ。ならそんな化物である俺は死ぬべき？」

「そんな事ない！！」

「でしょ？つまりはそういうことだよ」

「え？」

吸血鬼は確かに人を襲うのかもしれない
でも悪いのは襲った奴で吸血鬼という種族が悪いわけではない
そんな事言ったら人間自体滅ぼされないとおかしいし
まぁそれは置いといてだ、山に帰ろう

「ちょっと待って」

「今度は何かな？」

去ろうとしたら再び声をかけられる

「私も一緒に行っていい？」

「どうして？」

「私、元々吸血鬼じゃなくて、ある男の所為で吸血鬼になったの。でもその時両親は死んじゃって、私一人だけになったの…」

家族が居ないから寂しいってか

全く仕方がないな

「ほら行くぞ」

「良いの？」

少女の方に歩み寄り手を差し出す

「良いも悪いもそのつもりだったんだろ？なら行くぞ」

「……うん！」

少女は明るく笑って俺の手を取った

「俺は楠紅平（くすのきこうへい）だ」

「私はエヴァンジェリン・A・K・マクダウェル。よろしくね」

あれ？今まで気づかなかったけどこの子もしかして原作キャラ？

第三話「出会い」（後書き）

取り合えずあのセリフが書きたかった為に新規で小説を書いてみた、今でもアニメのあのシーンは鮮明に残っています。

他にも言わせたいセリフがあるのでちょくちょく入れてみようと思います。

何か言わせたいセリフがありましたら感想のほうで良いので下さい。

第四話「エヴァとこれからと」

原作キャラであるエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルを助けた俺は彼女を連れて山に戻ってきた

「それでこれからどうするの？」

「どうするって？」

お腹が空いてたらしく寝床から果実を渡しながらこれからの事を尋ねる

尋ねられた彼女は首を傾げる、なんかすごい可愛い

「う～んと、多分あの大人達がこのまま諦めるなんてしないと思うんだ。だから追っ手が来る前にここを出ようかなと」

「うん、それでどこに行くの？」

「実は俺ってここら辺の地理は分かんないんだ、だからこの辺りの地理が分かるだろう君に聞いたんだけど」

「ごめんなさい、私もよく分かんないの。必死に逃げてきて、近くの村に戦争孤児として生きてたの」

期待に答えることが出来なかったのか悲しいのかしょぼんとしている

「気にしなくて良いよ、君も「エヴァ」え？」

「君じゃなくて、エヴァって呼んで。私もコウヘイって呼ぶから」

原作キャラを名前で呼べるってすごいよね
しかも名前で呼んで貰えるって良いね

「分かったよエヴァ、それでどうする？」

「えっと、近くに大き目の河があったからそれに沿っていけば村が見つかると思う」

行く場所は決まったし早く行こうか

「よし、行こうか」

「えっ、もう行くの？」

「俺の国の諺で善は急げって言葉があるんだよ」
やはり意味は分からないのかキョトンとしている
説明は後にして早く出発準備をしよう

＊　＊　＊　＊　＊

「そういえばコウヘイってどこの国の人なの？」

「俺？ああ俺は日本って言っても分からないか、え～と、そうそうジャパンって言えば分かるかな？」

山を出て数分経ったころ俺の出身の事を聞かれた
ここら辺では見ない顔だから気になるよな

嘘なんてつく必要もないので素直に答えるとエヴァの顔が驚愕に変わる

「え！？あのジャパンなの！？」

「そんなに驚く事かな？」

「あたりまえだよ！お父様から聞いた事あるけど建物が全部黄金なんでしょ？」

は？建物が黄金だと？
そういえばエヴァって口調はこんな子供ぽっくなかったはず
あれ？もしかして…

「なぁエヴァ？今って何年だ？」

「何年って、え～っと今年は確か１４０８年だよ。一体どうしたの？」

１４０８年、まじか道理でこんなにエヴァが子供っぽいわけだ
いや、そもそも今歩いてるこの道だって現代なら舗装されてたり車が走ってたりしてるはずなんだ

「ねえねえ、それよりもさっきの話だけど、本当に建物全部黄金なの？」

「さすがに全部黄金は無いよ、壁に薄い金を貼った建物ならあるけどね」

「すごーい、ねえもっと教えてよ」

「う～んとそうだな、それじゃ…」

せがむエヴァに色々な事を話してあげた
日本の季節の移り変わりとか有名な場所とか
それを聞いているエヴァの目がキラキラ輝いていく

「コウヘイって色々知ってるけどいくつなの？」

「俺？え～と、多分５、６歳？」

余りにも昔のことなので実際この体が幾つ頃のか分からない

「嘘！？だってどう見ても私と同じ、１０歳ぐらいに見えたよ」

年齢が低いことに驚くエヴァ
勘違いの理由としては雰囲気もあるだろうけど多分俺の身長にある
俺は５歳児ではありえないほどの身長だった
だって平均身長よりも２０ｃｍはあるんだぜ？
あの頃は身長順に並んだら常に一番後ろ
だから運動会とかで並ぶときに先頭の子が手を腰に当てるのを見ると憧れもしたもんだ

「私は背はそこまで高くないからいいな～」

羨ましそうにこちらを見上げるエヴァ
そう、俺の身長はエヴァより少しだけ高い
その所為で基本エヴァは上目遣いになり俺の心をガリガリ削ってくる
なんというかこれが『萌え』なんだなと実感したりする

「背が高いなら高いで問題もあるんだよ」
一番印象に残ったのは皆でかくれんぼをした時のことだ
背が高いせいで隠れる場所が中々見つからない
見つけても体の一部が隠しきれなくてすぐ見つかってしまう
全く面白くなかったな

「ふ～ん、でも私はやっぱり背の高い方が良いな」

「どうしてだい？」

「だって背が高ければコウヘイになでなで出来るでしょ？」

エヴァが爪先立ちで必至に俺の頭を撫でようとしていたので少し屈んで撫でやすいようにする
しばらくワシャワシャと頭を撫でると満足したのか笑顔になるエヴァ
しかし何かを思い出したのかさっきの笑顔から反転、徐々に表情が曇っていく

「どうしたの？急に悲しそうな顔になって」

「……私もね、お父様にこうやってなでなでしてもらってたんだ。
でも今はそれが無いんだって、もう、お父様に…こうやって…してくれないんだって」

ぽつりぽつりと理由を話しているエヴァは今にも泣き出しそうで、
これ以上言わしたら駄目だと感じて

エヴァの腕を軽く引っ張り、抱き寄せる

「コウ…ヘイ？」

「いいんだエヴァ、泣きたいなら泣いて。エヴァはまだ子供なんだから我慢しなくても良いんだよ？」

「コウヘイ…えぐっ、うえ～～ん！」

俺の肩に寄りかかりながらエヴァは今ある感情を曝け出していた
それを受け止めながら俺は優しくエヴァの頭を撫でる
そうだ、俺はなんで気づかなかったのだろうか
まだ１０歳の少女が急に親を亡くして平気なわけがないじゃないか
しかも吸血鬼として追われ、殺されそうにもなった
俺は大馬鹿者だ！この子の辛さを察することが出来ないなんて

俺がこの子の傍に居てあげよう
この子の辛さを少しでも和らげる為に

そう心に誓い、未だ泣き続けるエヴァをそっと抱きしめた
少しでもその悲しみが癒えるようにと

第五話「新しい生活と迫り来る者達」

「おばちゃん、りんご5個ね」

「はいよ、りんご5個だよ。全く、うちの子はどこほっつき歩いてんだか。コウヘイ君を少しは見習って欲しいね」

「ははっ、ありがとう、また来るね」

果物屋のおばちゃんと他愛の無い話をしてお店を後にする
りんごの入った紙袋を落とさないように両手で抱えて歩く

彼女と出会ってからもう5年の月日が流れた
各地で戦争が行われていた為俺達は戦争孤児（そっちの方が都合が良い）として色々な所で生活をしていた
ここは6つ目の町でレンガ造りの家が立ち並んでいる
そんな町の隅っこに建つ小さな家が今の俺達の家だ
当初はここで買い物をするだけだったが俺達が戦争孤児だと知った町人が町長に相談してくれて現在ここで生活している
その町人というのはさっきの果物屋のおばちゃんだったりする

「お帰り、コウヘイ」

「ただいま、帰ったよ～」

扉を開けると金髪の彼女が出迎えてくれたので笑顔で答える
最初はなんか恥ずかしかったけど最近はこれが当たり前の日常になっているので慣れていたりする

「あのね、隣の家の人からパイを貰ったから、一緒に食べよう？」

「うん、分かった。この荷物置いてくるね」

さっき買ってきたりんごを台所に置いたあと、手と口を洗浄した後食卓に着く

「「いただきます」」

二人両手を合わせて合唱する
この言葉も彼女に教えてからもう何年も経っている

「それで、今日はどんなことをしてたの”姉さん”？」

一番変わったのはエヴァのことを姉さんと呼ぶこと
一緒に生活を始めて2年ぐらい経った頃、姉さんに言われた
私達は家族だよね？なら、私は年上なんだから姉さんって呼んで欲しい
そう言われた俺は精神年齢は上なんだけどなぁと野暮なことは言わずに了承した
多分エヴァと呼ばれるよりも姉さんと呼ばれたほうがより親しいと感じたんだと思う

「えっとね、朝は隣のカミラと一緒に果樹園の手伝いをしたよ。それでね…」

ここで生活を始めて俺達は少しでも恩返しがしたいと思い、それぞれ手伝いを始めた
最初はみんなしなくて良いんだよと言っていたけど、そこをなんとか頼み込んで折れてくれた

結局手伝いが終わったときにお駄賃を渡されるので意味がない気がするが
いや、することに価値があるんだと思っておく

「…そしたらバリーがお父さんに怒られて…コウヘイ聞いてる？」

「え？ああ聞いてるよ」

耳を傾けていないと気づいたのか姉さんが聞いてくるけど咄嗟に返事をして誤魔化す
しかしちゃんと聞いてないと分かってしまった姉さんはプクーと頬を膨らます

「姉さんそんなに膨れないで、ほらここに食べかすが付いてる」

「んぐ、ありがと。でもコウヘイが聞いてないのがいけないんだよ？」

「ごめんって、お詫びにさっき買ってきたりんごでタルトでも作ってあげるから」

それを聞くと許してあげると微笑んでくれた
良かったよ家事スキルがあって
前は一人暮らしで飯を集ってくる友人がいた為色々作ることが出来る

「それじゃぁ少し待って…ん？姉さん」

「うん、分かってる」

外で何か気配を感じたので姉さんを見ると、姉さんも気づいていた

みたいだ

「玄関に2人で両方杖を持ってる、空に飛んでいるのが1人、後は少し離れた場所に1人居るよ、こいつは剣士みたいだ」

姿勢を出来るだけ低くして、気づかれないように窓から外の状況を確認する

外は夜の為暗いが月明かりでなんとか見ることが出来た

「どうするコウヘイ？」

「そうだね、まずは食料の確保だ」

外に居る奴らはまだ動き出す気配が無いので急いで台所に行き食料を鞄に詰め込んでいく

「この後は？」

「俺が奴らの視界を塞ぐから裏口から出て！」

姉さんは俺の指示に頷くと裏口へ近づいていく

「すいません、誰か居ませんか？」

姉さんが裏口の取っ手を掴んだ時ノックと共に誰かの声がした

「は～い、今行きます」

玄関まで行き一回深呼吸した後戸を開ける

「どちらさまですか？」

「ちょっと聞きたいことがあるんだけど良いかな？」

戸を開けると人のよさそうな男と少し後ろに無愛想な男が立っていた
二人ともコートを着ており、片手はその懐に突っ込んでいた
多分さっき持っていた杖だと察する

「えっと、何ですか？」

正面の二人の男とギリギリ見える位置で滞空している大きな杖に跨っている男の動きに注意する

「実はね、この辺りで吸血鬼が住んでると聞いたのだが、知らないかね？」

「いえ、知りませんけど」

否定の言葉を返すけどこれで信じてくれるはずが無い

「そうか、なら力づくで聞かせて貰う！」

目の前の男が杖を出すが咄嗟に払って落とす
後ろの男の意識が杖に向いた瞬間に腕を突き出す
本来なら届かないはずの腕が届き男を吹き飛ばす

モクモクの実

これは海軍の本部大佐から本部准将になった男が食べた実
体を白い煙に変えることが出来

さっき男を吹き飛ばしたのは煙になってリーチが伸びた腕だ

「くそっ！「ホワイト・ブロー」がぁ！」

杖を落とした男はすぐに杖を取ろうとするがその前に殴って吹き飛ばす

「この小僧！」

「ジ・ニセツ・ショウセ・ニジョウツ　光の精霊（ケントゥム・エト・ウーヌス）…」

離れていた剣士が腰に納めていた剣を抜き切りかかって来る
同時に空に居た男が詠唱を始める
このまま戦えば負ける可能性がある
しかし、戦うのではなく逃げるなら方法はある

「ホワイト・パニック！」

両手を組んで思いっきり振り下ろす
それに合わせて手を煙に変える
すると地面に当たった煙が辺りに飛び散りこの一帯を煙だらけにする

「くそっ！どこに行った！」

煙で俺の姿を見失った男が叫ぶ
だが俺はすでにそこには居らず、姉さんと一緒に裏口から逃げ去っていた

第六話「ネ〇シーと金槌」

みなさんはＵＭＡをご存知だろうか？
ウマではなくユーマ
正式名称はＵｎｉｄｅｎｔｉｆｉｅｄ　Ｍｙｓｔｅｒｉｏｕｓ　Ａｎｉｍａｌ
日本語で言うならば謎の未確認動物と言ったところだろうか
噂では存在しているが実際は分からない生き物ことだ
例えば雪男などがそれだ
本来ならオカルトだからと終わっていたが、ここはネギまの世界
魔法の存在が確立された世界だ
ならばＵＭＡもいるのではないかと思い、追っ手から逃げながらやって来ましたここに！

「ネス湖だ～！！」

「コウヘイうるさい！」

「ごめんなさい！」

やっと来ることが出来てテンションが上がってしまい叫んだが姉さんに怒られてしまった

「それにしても大きいね」

「姉さん、世界にはもっと大きいのがあるよ」

「本当！？」

ネス湖の大きさで驚いちゃいけない
世界にはこれの数倍の大きさの湖なんてごろごろあるんだから
「と言うことで、姉さんこれ握って」
「本当にするの？」
心配そうに俺の渡したものを握る姉さん
「当たり前だよ！もしかしたらネ〇シーがいるかもしれないんだよ！」
「でもさ、溺れる前提でするのはどうなの？」
姉さんが先ほど握ったそれ、命綱を見せながら尋ねる
「大丈夫だよ、万が一の為だから」
今回はネ〇シー捜索に合わせてある実験も行うつもりだ
それは金槌になっているのかの実験
悪魔の実は食べるとすごい能力が手に入るけど、代償に金槌になってしまうという代物だ
一応女神様（幼女）にお願いして簡単に死ぬことが無いようにしてもらったが実際どうなるのか分からない
ということで捜索と一緒にやってしまおうと言う訳だ
「それじゃぁ、行ってきます」
「気をつけてね」

姉さんの気遣いを聞きながら綺麗なフォームで飛び込む
湖の水は綺麗でかなり先まで見渡せる

その後潜水をしながら進むが全く体に変化が無い
さすが女神様と感謝しつつ水面から顔を出す

「コウへ～イ、大丈夫～？」

岸の近くに立っていた姉さんに手を振って無事を知らせる

その後数分ネ〇シーを探したが見つからなかったので諦めて姉さんの所へ戻ろうとするが一つ面白いアイディアを思いついた
それは水中での能力行使
本来なら出来ない事だが俺なら出来る
ならばと派手に成りそうなのはと考えモクモクの実を選択してみる

意識を集中してモクモクの実の能力を使う筈だった

「か、体が…」

急に体が硬直して動けなくなる
そしてそのまま湖に沈んでいく
急いで能力を解除するが力が出ず、浮かび上がることが出来ない
ごめん姉さん…

「うりゃ～～！！！」

あと少しで溺死する時遠くで誰かの叫び声がして、それに合わせて体が水上へと引っ張られる
湖から出たとき見えたのは、命綱を一生懸命引っ張っている姉さん

の姿だった

＊　＊　＊　＊

「げほっ、ごほっ、あ、ありがとう姉さん。助かったよ」

岸で横になりながら姉さんに感謝する

「本当に何やってるの！後もう少しでコウヘイ…死んじゃうとこだったんだよ」

姉さんはさっきの光景が衝撃的だったのか涙ぐんでいる

「ごめん、まさかこれほど泳げなくなるなんて思わなくて」

はぁ、姉さんはまだ目が潤んでるし

どうすれば…よし！

「ふぇ！？」

姉さんの頭を優しく撫でるとビクッと体が震える、けど逃げることはせずにそのまま受け入れてくれた

数分するといつもの様に戻ってくれた

「さてと、そろそろ行こうか。体も冷えてしまったし、早く温まりたいしね」

「うん、そうだねそれじゃ早く……え？」

宿屋に向かう為に立ち上がったのだが何故か姉さんが俺の後ろを見て固まっている
俺もどうしたのだろうと思い後ろ、湖の方を見ると
湖の奥の方に水面から３ｍほどの首の長い生き物のシルエットが見えた
あれ？これって、もしかして…
「コウヘイ！出たよ、コウヘイが言ってたネ〇シーが！！」
興奮しながら湖に現れたあれを指差す姉さん
しかし、俺はそんな言葉は聞こえずまた湖に飛び込む
湖に入る直前に何かに引っ張られる感触にそういえば命綱外してないなと思いながら地面に激突した
その後再度湖に飛び込もうとした俺に腹が立った姉さんは俺に正座をさせ、説教を始めた
「だからねさっき分かったでしょ危ないって」
「…その通りです」
「なら、何でもう一度……」
説教は数十分続き
無事開放された俺は正座による足の痺れで虐められるのだった

第七話「そうだ、魔法世界に行こう」

「ねえ姉さん、一つ提案があるんだけど？」

「提案？」

現在１５世紀の中頃で最近アイルランド王国が出来たらしい
ま、それは置いといてだ

俺と姉さんは賞金首になった
姉さんはリトル・ヴァンパイア
俺は煙の男という二つ名が付いた
姉さんはまだ闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）とか呼ばれていない
基本モクモクの実の能力を使って逃げているから姉さんの力が余り
分かってないみたい

「そろそろ新しい魔法を覚えないときついと思うんだ」

理由としては行動がワンパターンになるからだ
姉さんの魔法は魔法の射手のみ
それでも吸血鬼という能力補正でかなりの威力だ
俺は当然使えない
そもそも、魔法よりも強力な技が多々ある
でも、それはまだ使う気は無い、手札は多いほうが良いからね
しかし、頭が切れる奴が相手だと戦うにしても逃げるにしても動き
が読まれてしまう可能性が高い

「仕方が無いよ、見よう見まねでやっているんだから」

姉さんが覚えた魔法の射手だって相手の呪文を覚えて必至に練習して使えるようにしたからだ

「そう、だからさ、覚えに行こうよ」

「どこに？」

「魔法世界、アリアドネにさ」

「ふ～ん、魔法世界にね…ええ！？」

もうこうなったらいっその事敵陣に行くべきだと
そう思って提案したらかなり驚かれた

「姉さんが驚くのは分かるけど、上手くいけば強力な魔法を覚えることが出来る」

不老不死であるからこそ魔法の習得に問題となる時間の心配をしなくて良い
上手くいけば新しい魔法を作る事だって出来る
それは強力な切り札になる

「でも、どうやって行くの？魔法世界に行くにはゲートを通るからその時にばれちゃうよ」

確かにこのまま行けば二人とも御用だよね
そう”このまま”だとね

＊　＊　＊　＊

魔法世界に行くためにゲートの受付までやって来た
姉さんは黒いフード付きのローブを着てフードで顔が見えない、俺はスーツ姿だ

「それでは身分証を提示して下さい」

俺達の番が来て受付の人に俺の身分証を渡す

「…はい、確認しました」

無事確認が終わり身分証が返される

「一緒におられる方はご家族の方でしょうか？一応犯罪防止の為に顔を見せてもらっても？」

俺の横にいる姉さんがビクリと震える
ここで顔を曝せば大事になる
しかし俺は平然と、だが細心の注意を払って受付だけに姉さんの顔が見えるようにする

「ひっ、あ、あな「シー、静かに」は、はい」

小さい悲鳴を上げた受付を落ち着かせる

「さっき身分証を見たから分かると思うけど、俺は連合に所属してるんだが、ちょっと前にこいつを捕まえてな、上の奴らが連れて来いってさ。ちなみにこれは極秘のため他言無用で頼む」

俺がそう言うと何も言わずに頷いてくれた
その後俺達はゲートへと向かう

「それにしても、コウヘイって理不尽だよね」

近くに誰も居ないのを確認した後姉さんが話しかけてくる

「どこが？」

「どこが？って、その姿だよ。どうして魔法が使えないのにそんな事が出来るの」

そう、今更だが俺はいつもの姿じゃない
ここに来る少し前にメガロメセンブリアから魔法使いがやって来た
当然生かしておいたけど逃げられないように拘束した
それで俺はある能力を使った

マネマネの実

オカマでバレリーナみたいな奴食べた実
右手で相手の顔に触れると触れた相手の姿や体格、声まで記憶して、
それらに変身できるというもの
その能力を使ってその魔法使いに変身したという訳だ
しかしこれには欠点があり、服装までは出来ない
なので魔法使いから着ていたスーツ、身分証と僅かばかりのお金を
頂戴した

「ま、それは置いといて、早く行こうよ。俺凄い楽しみなんだ」

姉さんの突っ込みを華麗にかわして歩き出す

ジト目の姉さんは見えない、ああ、見えないとも

「あ、ゲートが光りだした」

突っ込むのを諦めた姉さんがゲートを見ていたら、徐々に光を帯びだした

「さてと、姉さん。準備は良い？」

姉さんに最後の確認をする

今から行くのは敵の本拠地がある世界

能力があるから負ける気はしないが油断は禁物だ

「す～は～…うん、大丈夫」

姉さんは一回深呼吸をして決心を固める

それでも心配なのかスーツの端をぎゅっと握っている

「さあ、行こう、魔法世界へ」

ゲートは更に光だし俺達を魔法世界へと運んだ

第八話「はじめてのまほうせかい」

「コウヘイ！こっちに何か面白いのが売ってるよ！」

「姉さん！そんなに急がなくても商品は逃げないって！」

魔法世界にやって来た俺達はゲートの近くにある街、ウェルデンという所に来ていた

街に入ったのは良いのだが姉さんは初めての魔法世界の為か興奮している

その所為で自分が何者なのかとか服装が怪しさ満点の黒いローブとか気にせずに走り回っている

俺はいうといつ魔法使い達にばれるかとひやひやしながら姉さんを追いかけていた

「おう！譲ちゃん。ここは初めてか？」

「うん！初めてだよ」

「そうか！ならこれを食ってみろ、ここらで採れる新鮮な果物だ」

やっと姉さんに追いついたら果物屋のおじさんと話をしていてなんか果物を貰っていた

「すいません、うちの者が、これいくらですか？」

「おっ！譲ちゃんの兄ちゃんか？構わねえよ、この街の良さを知って欲しくてあげたんだからよ」

謝りながら果物の金額を聞いたらタダになった
ハッハッハと笑うおじさん
なんというか粋を感じたよ
ついでに言うと俺は兄じゃなくて弟です

「それで二人はどこに行くんだ？」

「え～と、アリアドネーです。あそこの魔法学校に用があって…」

おじさんと情報収集も兼ねて世間話していると後方が何やら騒々しい話を途中で切って後ろを見ると５０ｍほど先に物々しい格好の人達が人ごみを掻き分けながらこちらに向かっていた

「あ、やばい！姉さんにげ…何やってるの」

「…え？」

魔法使い達が俺達を捕まえる為に来たのだと察して逃げる為に姉さんを見ると

さっき貰った果物をちびちびと齧っていた
それはまるでハムスターみたいで可愛らしい

「か、可愛い…じゃなくて。姉さん！食べるのは後にして行くよ！
おじさん、ありがとね」

「ふぇ！？」

「おう！また来な！」

まだ状況が分かってないのか食べ続けている姉さんの手を取って走り出す
当然おじさんにお礼を言うのは忘れない
それをおじさんは豪快に笑いながら見送ってくれた

＊　＊　＊　＊　＊

「どこに行った！」

「そっちはどうだ！」

「こっちは居ない」

おじさんと別れて俺達は路地裏に来ていた
最初は見つかると思い焦っていたが、近くに丁度良い大きさの木箱を発見
それを使ってスネークを敢行
なんとか敵の目を誤魔化すことが出来た

「くそう、どこに逃げた。お前はあっちだ、俺はこっちを探す」

「分かった」

一人の魔法使いの指揮で別々に分かれてこの場から離れていく
足音が遠ざかり人の気配がしなくなった所で被っていた木箱をどかす

「ふぅ、姉さん大丈…はぁ、姉さん？」

「あむっ、何？コウヘイ」

無事に危険から脱したと言うのに姉さんはまだあの果物を食べていた
何故か今日の姉さんは幼すぎる
１００年は生きてきたからある程度はしっかりしていたのだがどうしたんだろう
初めての魔法世界だからなのか
それとも、今更になって精神が体に引っ張られたんだろうか？
確か原作でも６００年生きていたとは思えないほど子供じみた事があったけど
とりあえず一つだけいえる事がある

今の姉さんはジャスティス！！
誰がなんと言おうとだ！！

「どうしたの？」

俺が心の中で叫び、体をプルプルさせていると姉さんが心配そうに見てきた
やばい、今の姉さんの可愛さはあのチワワを越える！

「あっ！あそこで魔法具が売ってるみたい。コウヘイいこっ！」

笑顔で手を差し出してくる姉さん
それを俺は無言（悶え過ぎて話せない）でとり、一緒に歩き出した

どうしよう、俺、シスコンかも…

第九話「学校生活」

アリアドネーに存在する学校、魔法騎士団候補学校
そこに姉さんと入学して３０年ほどが経った
最初は吸血鬼と未知の力を使う男ということで危険視されていたが
時間が何とかしてくれた

「はい、姉さん。教科書を忘れているよ」

「ああ、すまない」

授業に必要な教科書を忘れていたのでそれを姉さんに渡す

「それで今日はどんな授業なの？」

「そうだな、今日は魔法の射手の速度と魔力の関係の講義を行う予定だ」

パラパラと俺が渡した教科書を見て答える

今ので分かると思うが姉さんがここの教師になった
元々が優秀なので入学からわずか1年でここで学べることは全て学んだみたいだ
1年目の終わりには教師と魔法について討論をしたみたいだ
…その日の講義が全部潰れたけど

「それでお前はこれから何をするんだ？」

「え～と、確か薬草学の実験だったかな」

俺はと言うとこれから実験の手伝いをする

「そうか、あまり無理はするなよ？あの時みたいになったら私も手に負えん」

昔を思い出したのか顔を顰めてる

「あはは、大丈夫だよ。しかもそれは１０年ぐらい前の事だよ？」

「そうだな、あの頃よりも能力を上手く制御出来るようになったからな」

「そうそう…あ！そろそろ行かないと、じゃあね姉さん」

腕時計を見ると時間が迫っていたのでさっさと移動する

＊　＊　＊　＊　＊

「さて、皆さん準備は良いですか？」

教壇に立つ教師の言葉で皆が注目する

「今日は薬草の効果と混ぜ合わせによる変化についてです。それではＭｒ．マクダウェルよろしくお願いします」

教師に促されて俺も教壇に立つ

「まずはミナゲル草を煎じたものを飲んで頂きます」

そう言いながらオレンジ色の液体が入ったフラスコを渡される
そして俺はそれを一気に飲み干す
すると俺の髪がどんどんオレンジ色に変わっていく

「このようにミナゲル草だけでは髪の色が変わります。しかし、これに別の薬草、例えばコーラル草の煎じたものを2対1で混ぜ合わせると…」

更に別のフラスコを渡されそれを飲み干す
体が少し赤くなり事前に作っておいた右腕の傷がみるみるうちに消えていく
それを見た生徒が驚きの声があがる

「傷を癒すことが出来ます。それでは皆さんの前にある薬草を上手く使って先ほどと同じ様な物を作ってください」

教師の合図で生徒が各自に薬草を煎じ始める
それを確認した教師はこちらに振り返る

「毎回協力ありがとうございます。おかげで講義の進みが早くなりました」

「良いですよ、俺にはこれぐらいしか出来ませんし」

俺がここでやっているのは魔法薬の試飲
組み合わせ次第では毒物になってしまうそれを俺はどんどん飲んで

いく

ドクドクの実

とある監獄の署長が使う能力
あらゆる毒物を体から分泌することが出来る
そしてあらゆる毒に対して耐性を持っている

ここに来てから一番練習したもので
今なら毒物を摂取したら自動で行使できる
しかも即死とか痙攣とかにだけ反応することも出来る様にもなった
先ほどの姉さんの発言はこの制御が上手くいかない時に運悪く幻覚をもたらす物を飲んだことで姉さんに絡んだのだ
その時の姉さん曰く普通の酔っ払いよりも数倍性質が悪かったとのことだ

「コウヘイさーん、出来たので飲んでもらって良いですか？」

昔の事を思い出していると生徒の一人から声が掛かる
場所を確認してそこへ行くと青いツインテールの生徒が笑顔でフラスコを渡してきた
中身はなんというか毒々しい
蛍光色の紫で偶にブクブクと気泡が出来る

「え～と、これだよね？」

「はい！一生懸命作りました」

戸惑っているとニコニコと笑いながら俺が飲むのを待っている

「……え～い！！男は度胸だ！」

その危険な魔法薬を飲み干す

途中ドロリというか固体が喉を通った感触があった

「……あれ？案外だいじょう…！？」

何とも無かったので安心した途端激しい腹痛が起きる

しかもドクドクの実が自動発動しているし

やばい！そんな事より早くトイレに行かなければ！

「ちょっとトイレに行ってくる」

そう教師に言ったあと全速力でトイレへと走っていった

その後、あの魔法薬は害虫駆除用としてかなり売れたらしい

第十話「エヴァの日記」（前書き）

エヴァと紅平の出会いの前後を日記風にして書いてみました

第十話「エヴァの日記」

○月×日
私の１０才の誕生日
パパとママがおめでとうと言ってくれた
他にも色々な人が祝ってくれた
とてもうれしかった

○月△日
あの男が憎い！なぜパパやママが死なないといけなかったのか！
どうして私なの！返してよ！パパとママを返して！

○月□日
ついにあの男を殺すことが出来た
パパとママの無念を晴らすことが出来た

○月■日
私は新しい場所で生活を始めた
ここは昔パパ達が使っていた別荘ありそこに住んでいる
家事とかはママの手伝いをしただけで全然出来なかった
でも近所のおばさんが色々と教えてくれた
多分これなら大丈夫

△月○日
私が住む村で一つのうわさが流れていた
あの男が殺される前に流したものだと思う
うわさのせいで近所のおばさんが怪しんでいた

△月■日

大勢の大人が私の家の前にがやってきた
私がうわさの吸血鬼と気づかれたみたい
早く逃げないとひどい目に遭いそうだったので裏口からこっそりと
出て村から逃げた

×月●日
別の村に来たけどここもあのうわさが流れていたみたい
その所為で大人達に追われることになった
まだ吸血鬼になって短いからなのか体が思ったとおりに動かない
村のはずれで追いつかれて囲まれてしまった
もう駄目だと思っていたら一人の男の子が私の前に現れた
黒に近い短い茶髪で見た目は私と同じぐらいの男の子
彼は私の言葉を信じてくれた
でも大人達は信じてくれず私に農具で殺そうとしてきた
怖くて目を瞑っていたら大人達が驚く声が聞こえてそこで目を開けた
目を開けると最初に見えたのは彼がバラバラに切られた姿
おもわず声をあげてしまった
だって私を守るために死んでしまうなんて
大人達は次は私だとさっき彼をバラバラにしたそれで私に切りかかった
でもそれは私に届くことは無かった
何故なら彼がバラバラのまま浮き上がって男達を睨みつけていたから
大人達はその姿を見て化物だと騒いで逃げていった

しばらく目の前の出来事を理解できなくてボーっとしてしまった
その後私の状態を確認した彼はどこかへ去ろうとしていた
その時私は彼を呼び止めていた
なんで呼び止めたのかは分からない
きっと今まで化物扱いされてきたのに彼はそれをしなかったから
それを聞いたら彼は逆に尋ねられた

俺は化物だけど死ぬべきかと
私は全力で否定した
だって私を助けてくれたんだよ？そんな人が死んで良いわけない
そうしたら彼は笑いながら言った、つまりはそういうことだって

それだけ言うと彼はまた去ろうとする
それを引き止めて彼にお願いする
私も一緒に行って良いかと
それと今までの事も話した
でもきっと駄目だよね
そう思っていたら彼は私に近づいて手を差し出してくれた
良いの？と確認をすると行くぞと答えてくれた
それに私はうなずくと手をつないで歩き出した

これが私と紅平の出会い
多分これから長い間一緒に生きていく相手

×月△日
紅平から自身の能力の事を聞いた
なんだか私よりも化け物らしい化物だった
吸血鬼よりも理不尽な存在って……

追記：紅平が私の家族になりました

第十話「エヴァの日記」（後書き）

今更ですが私は原作は立ち読みで所々しか読んでないので細かい設定が分かりません
後はアニメを数話とＮＯＳのネギま！関係の小説を読んだぐらいです
一応ｗｉｋｉとかで調べて書いてますがこの小説を読んであれ？と思った所があったら感想に書いて頂けるとありがたいです
ですが、頂いた感想を全部取り入れることは私の文才からしてとても難しいです
採用されなかったときはごめんなさい

第十一話「ドラゴン退治」

「「ドラゴン退治〜！？」」

「はい、その通りです」

今日の講義も終わり俺と姉さんが暇になった時呼び出しをうけた
俺達を呼び出したのは女性である役職に就いている
偶にお願いを頼まれるので今回もそうだろうなと思っていたが
俺と姉さん、二人の驚きの声に冷静に答える女性

「あの総長？ドラゴンってあのドラゴンですか？」

「ええ、あなたが思い浮かべているドラゴンで間違いないと思います」

大きくて長い尻尾と翼を持つ、あのドラゴンですよと笑顔で答えてくれた
どうやら俺の聞き間違いではないみたいだ
ちなみに総長と呼ばれたこの女性はアリアドネー魔法騎士団の偉い方で総長と呼ばれている
更に言えば原作で出てきたセラスさんに似ているが本人では無い、おそらくセラスさんの家系の人だろう

「それで、どうして私達なんだ？」

姉さんは最近、と言っても数年前になるが見た目から嘗められないように口調を変えた
俺からすれば子供が大人ぶっているように見えるのだが

昔それを言ったら殴られた、ゴムゴムの実の能力を使っていたのにたんこぶが出来た
ワンピースでもあったお約束的なものを俺が体験するとは思っても見なかった

「実はこの近くで暴れていると連絡を受けたので討伐部隊を送ったのですが…」

「返り討ちに遭ったか？」

「ええ、幸い負傷者だけですが、このままだと住人に被害が出ます」

「なるほどな、そうなる前に私達に始末させようということか」

なるほどね、確かに姉さんの実力は魔法使いの中でもトップレベルだ

「そういうことです。どうですか？この依頼受けて頂けませんか？」

「どうする姉さん？」

「ふん、良いだろうその依頼を受けよう」

仕方が無いみたいな顔をしてるけど、実際はいつも世話になっているお礼をしたいんだと思う
最初この学校に入ったときは周りから奇異の目で見られ居づらい時に総長は助けてくれた
吸血鬼である姉さんと魔法とは違う能力を持った俺
本当なら恐れるはずのそれを総長は一つの個性だと言い切った
化物であるはずの俺達を一人の人間として見てくれた
それからは俺達は一生懸命勉学に励み総長に恩を少しでも返そうと

した
だから、この依頼も恩を返す為の一つなんだと思う
多少のツンデレはあったけどね

「ありがとうございます」

「お礼は後で良い、さっさと詳細を話せ」

総長がお礼を言うと姉さんは話の続きを促してるけどわずかに顔が赤くなっている
姉さんのその姿を見てるとニヤニヤしてしまう

「ふふ、そうですね。それじゃこれを見てください」

総長も姉さんが照れているのに気づいているのか笑顔で書類を渡してくる
話は数十分ほどで終わり俺達は準備の為に部屋へと戻っていった

＊　＊　＊　＊　＊

総長からの依頼を受けた翌日
俺達はアリアドネーから少し離れた森の中に居た

「紅平、本当にこっちであってるのか？」

「大丈夫だよ、さっき話を聞いたらこっちに向かったって」

ガサガサと草を掻き分け歩く俺とその後ろをついてくる姉さん
少し前にここに住む動物達に話を聞くとどうやら森の奥に逃げ込んだらしい

「まったく、ドラゴンも面倒な場所に逃げ込みおって」

後ろでぶつぶつと文句を言っている
確かに荒野とかなら姉さんの魔法で一発だが森の中だと少し面倒だ
ここには珍しい植物などがある為総長からも広域殲滅魔法を禁止を言い渡された

「まぁまぁ姉さん、落ち着いて。確かに魔法を使ってさっさと終わらせる事は出来なくなったけど、その分報酬も増えたんでしょ？」

「まあな、最初は金銭だけだったが、なんとか交渉をしてドラゴンの鱗などの素材も少しは貰えるようになった」

出発前にドラゴンが森に移動したと聞いた姉さんは報酬の追加を要求していたのだが上手くいったようだった

「それでいつになったらドラゴンは居るんだ？」

「え～と、もう少しで…あっ居た」

歩くこと数十分
なんとかドラゴンを見つけた俺達は気付かれないように茂みに身を隠す
どうやら前回の討伐隊との傷が残っている様でドラゴンが持つ荒々しさが無い

「私は奴を後ろから仕留める、紅平は囮になれ」

「分かった、タイミングはこっちで取るから合わせてね」

作戦を決めて姉さんは気付かれない様にドラゴンの後ろに回りこむ
俺はより注意を引けるように近づくのだが
直感か匂いか、ドラゴンが俺の存在に気付き咆哮を上げる
そしてそのままこちらへ突っ込んでくる

「え？」

「紅平危ない！」

俺はあることに意識が捕らわれて反応が出来なかった
それに気付いた姉さんが叫びながらドラゴンの背中を魔法で作った刃で切りつける
ざっくりと背中を切られたことによりその体は俺に届く前に地にひれ伏す

「大丈夫か紅平！」

「ああ、なんとかね。それよりも…」

ドラゴンを見ると背中の傷から血が溢れ出している
あと数分もすれば息絶えるだろう
でも…

「どうした？」

俺の異変に気付いたのか姉さんが声を掛けてくる

「あのさ、このドラゴン助けようよ」
「はぁ！？何を言ってるのか分かっているのか！？」
俺の提案に姉さんが驚きの声を上げる
何を言ってるのか分かっている
俺を殺そうとした奴を助けようとしているなんてありえない
「そうだよね、でも助けたいんだ」
「紅平…ああもう分かった、助けよう。ちょっと待ってろ」
俺の気持ちを汲んでくれた姉さんが持ってきた鞄をごそごそする
しばらくすると液体が入った瓶を何本か取り出して中身をドラゴンの傷に振りかける
「よし、これで傷は塞がる筈だ。後はこいつで…」
瓶を仕舞うと次は水晶玉を取り出す
この水晶玉は別荘と呼ばれる物で対象を水晶の中に作られた特殊な空間に移動させる
その水晶玉を使い、ドラゴンを転移させた
「ありがとう姉さん」
「全く、これでは報酬は貰えないではないか」
腕を組み頭を軽く横に振りながらやれやれとため息を吐く姉さん

「本当に御免なさい」

「いいさ、弟の頼みだ姉としては当然だ。さて、帰るか」

水晶玉も鞄に入れて飛び上がる姉さん

本当なら俺も飛びたいのだが残念ながらその術は無い

「私は先に帰っているぞ」

「え！？ちょっと姉さん待って…行っちゃった」

言うだけ言って姉さんはさっさと帰ってしまった

おそらく報酬が貰えなくなったことによる嫌がらせだと思う

一人残された俺はとぼとぼと元来た道を戻っていった

部屋に戻ってこれたのは姉さんの３時間後だった

第十二話「ドラゴン退治、その翌日」

「紅平、早くご飯を作れ」

「紅平、私もお腹が空きました」

と二人の金髪少女（片方は幼女？）にご飯の催促をされる俺
最近我がマクダウェル家に新しい家族が入った

名前はリリィ・マクダウェル
身長は俺と同じくらいで１５４ｃｍ位
顔はヨーロッパ系の顔で姉さんとはまた違ったお人形さんみたいな感じ
いつも少し長めの金髪を黒いリボンでポニーテールにしている
体形はいわゆるスレンダーと言われるものだが姉さんと良い勝負かな？
まぁぶっちゃけるとどこかの聖杯を奪い合った優良のサーヴァントさんと同じです、はい
実際名前もそこから取ってきましたよ、少し捻って派生キャラの名前ですけどね

今更だけど俺は一世紀半ぐらい経ったので体の年齢はおおよそ８，９歳
それにプラス２３，４ｃｍなので１５５ｃｍ位になっている

とそんなことはどうでもよくてだ
どうして彼女が家族になったのか、それは数日前に遡る

＊　＊　＊　＊
アリアドネーの近くの森で暴れていたドラゴンを姉さんのダイオラマ魔法球に閉じ込めた翌日
俺は姉さんには内緒で魔法球の中に入っていた

「いやぁ、姉さんにばれない様に講義を替わってもらったけど…」

一応理由としてはあのドラゴンと一対一で話をしたいからだ
姉さんに言ったら心配して着いて来てしまう
しかし、それでは相手が警戒して話が出来なくなる可能性が高い

「ここはどこだ？」

なんとなく森の中に入っていったけどドラゴンってこの辺りに居るのか？
そもそも俺って今どこら辺に居るんだ？
一応何回か来たことあったけどその時は姉さんが居たから道が分かったけど、その姉さんが居ない今は彷徨うほか無い
姉さんを連れてこないようにしたのが仇となってしまった

「お～いドラゴンや～い、って呼んでも見つかるはず無いか。…ん？」

彷徨うこと数十分、未だに目的のドラゴンを見つけられずにいた俺は少し離れた所から水音がするのが聞こえた

「水音？俺しかいないはずだから一体誰が？」

音の主に気付かれないように静かに進む
数m進むと森を抜けることが出来た
そこは小さな湖があり、どうやら先程の水音はここから聞こえてきたようだった

「こんな所に湖があったなんて、あれ？あそこに誰か…」

湖をかるく見回すと浅瀬に人影が見えた
相手はまだこちらに気付いてないようでまだ水浴びをしていた
更に距離を詰めるが相手は背中を向けていて未だに気付いていなかった

「あの、ここで一体何を？というよりどうしてここへ？」

残り数mになったところで声を掛けるのだが相手は体をビクリと震えただけで何も反応しない
とそこで俺はあることに気付いた
あれ？もしかして女の子？
逆光で分からなかったけど体が細い
肩まである金髪は後ろで束ねてポニーテールになっている
実は背中に大きな傷があったからなんとなく男だと思っていたけど
それ以外で考えると女性のようだ
と色々考えることわずか０．１秒、そこで初めてやばいと感じた

「お～い、紅平。どこにいるんだ～？」

背を向けて逃げようとするとき俺がここに居ることに気付いた姉さんが空を飛びながらやって来た
本当なら呼ぶべきなんだろうけどこの状況ではとてもやばい

「あっ！見つけたぞ紅平、ドラゴンに出会ったらどう……紅平？」
が時すでに遅く姉さんに見つかってしまった
うん、姉さんの雰囲気がとてもやばい
「ちょっと！？姉さん落ち着いて、これには深い事情が！」
「大丈夫だ、私はいたって普通だぞ。まさかお前がこんな所に女を連れ込んでいたなんてこれぽっちも怒る理由じゃないぞ」
いやいや姉さん完全に怒ってるじゃん
「そうだな、ここは少し暑いみたいだ。少し（頭を）冷やそうか？」
「冷やすの意味が違うでしょ！？」
魔力の高まりと共に姉さんが呪文を唱え始める
「リク・ラク　ラ・ラック　ライラック　来たれ氷精（ウェニアント・スピーリトゥス・グラキアーレス・オブスクーランテース）　闇の精！！
闇を従え（クム・オブスクラティオルビット・テンペスタスツ・ヌーリス）　吹雪け常夜の氷雪闇の吹雪（ニウィス・テンペスタース・オブスクランス）！！！」
「まじ呪文！？ちょっとま…ぎゃ～～～～！！！！」
悪魔の実の能力を使う間もなく魔法が俺に襲い掛かってきた
そして吹っ飛ばされ湖に叩きつけられた俺はそのまま意識を失った
数時間後目を覚ました俺はそのまま腕を組んで未だご立腹だった姉さんの前で正座
先程の女性はその隣でおろおろしていた

「さて、始めに聞きたいのはこの女は誰だ？正直に答えろ」

「え～と、俺としてはさっきが初対面なんだけど…」

「……そうか、どうやら嘘を言っているわけではなさそうだな。となると先程の話は本当と考えるべきか」

先程の話って何？

「ええ、ですから私は話したはずです。彼とはこの姿では初対面であると」

姉さんの隣に居た女性、面倒だからセイバー（仮）って呼ぶけどどうやら俺が目覚めるまでに話をしていたみたいだ

それでこの姿って？

「そうだな、あっちの姿は見せてもらったし信じるとするか」

「姉さん、二人で話を進められても困るんだけど」

俺だけ仲間はずれでなんか寂しい

「ああ、お前とは話はしていなかったな。簡単に言えばこいつは昨日のドラゴンだ」

は？ドラゴン？

「ふむ、どうやら信じていないみたいだな。ほらこいつにも姿を見せてやれ」

と姉さんに促された彼女は一回頷くと俺達から少し離れる
しばらくすると体が発光しだして完全に光に包まれると光は大きくなっていく
大きくなった光が形を変えて光が収まるとそこに居たのは昨日遭遇したドラゴン

「ええ！？ドラゴン！！」

「ふはは、驚いているみたいだな。よしもういいぞ」

俺の驚く姿に満足した姉さんが彼女に指示を出して先程の姿に戻らせる

「君があのドラゴンだったのは分かったけど、どうしてあんな場所で暴れていたんだ？」

そう、それは昨日からずっと考えていた疑問
本来ならあの場所にはドラゴンは生息していない、更に言うならばその周りの地域でもここ数十年は目撃されていなかったらしい

「それは、その…」

言いにくいのか、はたまたまだ俺達が信頼されていないのか彼女は口を閉ざしてしまった

「私もさっき同じようなことを尋ねたのだが、何も話そうとはしない」

彼女の横でやれやれといった感じで姉さんが話す

ふむ、あちらが話さないならこちらからきっかけでもつくるか

「もしかして昨日言っていた”仲間”が関係するのか？」

「どうしてそれを！？」

どうやら当たりだったらしい

昨日聞いた言葉は”よくも仲間を！！”

推測になるけど彼女以外にも仲間がいて、何かの事情で彼女だけが逃げることが出来たって所か

「紅平、お前が昨日言っていた気になることとはこの事だったのか？」

「まあね、体はボロボロで仲間と口にした。総長から詳しく聞いてたけど他にドラゴンが討伐されたというのは聞いてなかったでしょ？それで何かあって彼女だけがあそこに居たんじゃないかなって思ってさ」

それに村などを襲う悪いドラゴンなら会った直後に襲われていたはずだしね

傷を負っていたのもあるけど基本は待ちの姿勢で間合いに入ったときだけ襲うって事は自身を守るためだけで悪さをする気は無いってことだし

「まさかあなたは私の言葉が分かったのですか！？唯の人間がドラゴンの言葉を理解するなど…」

「こいつには色々と人間離れしたものがあってな、その中の一つだ」

「それは素晴らしいことですね」
弟の俺が褒められたのが嬉しいのか姉さんがなんかニヤニヤしてる
「それじゃ、教えてくれ。君に一体何があったのか」
それから彼女は色々と話してくれた
自身の先祖が旧世界の人達であること
その昔に力を得るためにドラゴンと交わったこと
そのドラゴンの血が少なからず自身にも流れていることを
「そこに目を着けたのがメガロメセンブリアの連中でした。私達一族を捕らえてドラゴンの力を手に入れようとしたのです」
「ふん、奴らの考えることだな」
「捕まった私達は研究所で様々な実験をしました。一般人との身体能力の比較に始まり、怪我の回復速度の検証、臓器の交換によりどのような変化が起きるのか…」
彼女は黙々と語り続けていた、途中その時の恐怖を思い出したのか体が震えることもあったけど、それでも彼女は話し続けた
「私と他数人の場合は投薬によってドラゴンの血を無理やり覚醒させるものでした。それによって私はドラゴンに姿を変えることが可能となりました。本来ならそこで実験は終わる筈だったのですが投薬された一人が暴走して研究所の一部を破壊しました。それにより研究所の職員は投薬された私達に危険を感じて殺そうとしましたが、それに気付いた仲間達が一斉に暴れだし自身の命を顧みずに私を逃がしてくれたのです」

「なるほど、それに気付いた職員が追いかけるがなんとか振り切り私達に出会ったと、そんな所か？」

「ええ、そうです。この辺りはメガロメセンブリアも簡単には手が出せない地域だったので辛うじて逃げることが出来ました」

これが私に起きたことですと話を終わらせると場は静かになった

まったく、メガロの連中も碌なことしないな

どうせその研究も立派な魔法使いに成る為の一環だと考えているんだろう

「それでどうするんだ？」

俺が心の内でメガロに対する怒りを燃やしていると姉さんがこれからのことを尋ねた

「そうですね、しばらくここで体の傷を癒すのを許して欲しい。癒えたらあなた達の迷惑にならないようにどこか遠いところにでも、いっそ旧世界にでも逃げようと思います。それが無理なら仲間の仇でもとるつもりです」

「それが出来ると思っているのか？恐らくだが奴らは貴様を指名手配しているぞ？その状態でどこに逃げるというのだ、ゲートも使えないだろうから旧世界に行くことも出来ない。それにだ、迷惑にならない様にというが関わってしまったんだ、奴らに私達が出会ったことがばれるのも時間の問題だ、無論復讐なんて尚更だ」

そうだよね、アリアドネーは中立の立場だから魔法学校に在籍している人たちの中にスパイがいてもおかしくない

もしいたらあっという間に情報が伝わってしまう

「ならば、ならばどうすれば良いのですか！逃げることも出来ない、復讐も出来ない！これから私はどうすれば…「そんなことは簡単だ、私の家族になれ」え？」

ちょっと！姉さん！何言ってるの！

「聞こえなかったか？私の家族になれと言ったんだ。ここにいれば奴らも手出し出来まい。それにここには魔法学校がある、身を守るにしろ復讐にしろ最適な環境だぞ」

そりゃ環境は整っているけどさ、家族にするって…

「…そうですね、どちらにしろここに居たほうが良いみたいですね。これから宜しくお願いします。それとありがとう、こんな私を家族として受け入れてくれて」

「ふ、ふん、その代わりきっちり仕事はしてもらうぞ」

お礼を言われたのが恥ずかしいのかそっぽを向く姉さんは彼女からは見えないが顔が真っ赤だった

その後彼女はリリィ・マクダウェルと名乗り俺達姉弟の長女となったこの時姉さんが身長が…とぶつぶつ言いながらうな垂れていたのを目撃していたりする

傍から見たら姉さんが一番下の子に見えるよね、主に身長的な意味で

ついでに言うと俺は某正義の味方の苦労が分かった気がする

主に食費的な意味で、なんだよ食費が5倍に膨れ上がるって！

第十二話「ドラゴン退治、その翌日」（後書き）

初めて一話で４５００文字を超えた
多分次はまた２０００文字になるんだろうな～

それと今更ながら累計ＰＶが６４０００越え、アクセスが１２０００越えととても驚いています
お気に入りも１２０件もありかなり嬉しいです
この小説を読んで頂いてありがとうございます

感想を書いて頂けるとモチベーションが上がって執筆速度が上昇します
一言でいいです、微妙でも、面白いでも、ここが駄目でも何でも良いので待っています

一応次回はキャラ設定でも書こうかなと思っています
しかし、読んでもらっても分かるとおり容姿の表現力などが乏しいのできっと○○と言う漫画の××見たいな感じだと思います

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3970v/

オタクの魔法世界珍道中

2011年10月2日15時11分発行